

# バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第150号 [2017年8月]

## さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8章 22節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・＋・・・

主の聖名を賛美します。バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第号をお送りします。8月は毎年恒例『ヨーロッパキリスト者の集い』がライブチヒで催され、当集会から3人が出席してきました。こちらに最終日の主日礼拝説教をご紹介します。

「みなが一つとなるため」ヨハネ福音書 17:20-26

矢吹師



今日のテキストは主イエスの祈りですが、この祈りによって父と御子の交わりがどのようなものであったのかを垣間見ることができます。イエスが弟子たちから離れて十字架にかかる時が来たという事を伝えた直後に捧げられたこの祈りにある「私の時」とは「十字架にかかる時」のことです。つまりこの祈りは人間が生きるか滅びるかという時の祈りで、世界でささげられた数えきれない祈りの中で最高位のものであります。

5節の「栄光を与えてください」とは、イエスが偉大なことをなして輝くということではなく、「罪ある人々のための完全ないけにえとして十字架にかかることができるように」を意味します。そうすれば、すべて信じる者に永遠の命が与えられ、神と人々とに和解がもたらされ、父の栄光が現わされるからです。天の神は罪人を見捨てないために、代わりに御子をお見捨てになったのです。この日に祈られた主イエスの祈りは私たちのための祈りでもありました。そして祈りはすべて応えられ、主は十字架上で「完了した」と仰って息を引き取られました。

6節からは弟子たちのための祈りです。弟子たちは必ずしも模範的な信者ではありませんでしたが、「彼らはあなたのみ言葉を守りました」と、愛をもって彼らのことを肯定的に祈っておられます。9節では弟子たち11人がイエスの死後、彼の弟子であることから苦しみを受けることをご存じで(14節)、彼らの信仰が取り去られるのではなく、護られるようにと祈られたのです。ルカ21章に「(ペテロが)立ち直ったら兄弟たちを力づけてやれるように」と祈ったとありますが、ここから主は弟子たちひとりひとりの為に個別に祈っておられたこともわかります。ペテロはずみましたが、護られたのはこの祈りによります。しかし19節では、護りの範疇から1歩出て、イエスが聖められて十字架につくように、弟子たちも苦勞なくイエスの仕事をするのではなく、彼らもその命を、イエスが遣わした働きのために落とすという事を私たちに伝えているのではないのでしょうか。

もし1-5節の祈りが応えられず、イエスが十字架にかからなかったなら、6節以降の祈りは意味がなくなります。イエスが世に勝ってくださったので、彼らもこのイエスの祈りに励まされて遣わされ、どんな苦しみに遭ってもひとつであることを失うことなく、主の御業を生涯にわたって成し遂げていきました。その彼らの働きの先に教会があるのです。今の私たちがいるのです。

20節以降はイエスを信じる者、つまり私たちのための祈りです。最後の晩餐からゲツセマネの園に行かれるまでの間に、主イエスは私たちのために祈られたのです。この時主は、のちの教会の課題もご存じで、この為に祈っておられます。まず、「一つとなること」。これは、父、子、聖霊の三位一体の関係と同じような関係を指しています。人と人が一つとなる事は、御子を信じる者たちが神と和解させていただき、神を知る者となることによらなければ実現できませんが、これこそ神に創られた主にある愛の交わりであり、人間の本来の姿です。教会がこの世に建ち続けるためには、父と御子がひとつであるように、私たちが愛の交わりの中にいるという事がカギです。そして神をしらない世は、それを見て神に愛されていることを知るのです。(23節)

最後に主は「私に与えてくださった人々を、わたしのいる所に、共におらせてください」と祈られました。(24節) 私たちは神のおられる所に立たせいただき神の栄光を見ることができるのです。この確かな希望を抱いて、キリストにあってひとつである者として、私たちはここから遣わされていくのです。 [終]

このメッセージの全文を聞きたい方はこちらから: <https://www.europetsudoi.net/> 第34回-leipzig-特設サイト/